金沢医学館の図面について

寺畑喜朔

"Neue Informa" 九巻七号に、宗田一先生が「金沢の医学校」について執筆されており、その中で「医学館の平面図」(兼六会館蔵) が収載されている。筆者はかねてよりこの平面図の原図の所在を確かめようと心掛けていたが、この度の宗田先生の図面収載が刺戟となり、調査を始めたところ、原図の出所が明らかとなったので報告する。

㈠兼六会館蔵の図面　元兼六会館 (兼六園管理事務所) の職員であった中村戍氏が、兼六会館の建物は明治三年金沢大手町の津田玄蕃邸を以て医学館としたことを知り、兼六会館が単に加賀藩家老邸跡であるのみならず、金沢大学医学部の淵源である金沢医学館の遺構として評価し、兼六園採勝の人々に医学館の図面を探して供覧した。中村氏は既に退職しており、その所在を尋ねて図面の出所を確かめたところ、「日本学校史の研究、石川謙著、昭五二」に所載の医学館の平面図であるとの教示をうけた。

同書には、図面は「金沢市立図書館所蔵の医学館絵図」とあり、「病室 (三五室)、診察処、手術処、医局、薬局といったような病院関係の施設が大幅に場所をとって、学校として働く施設には講堂 (一)、講場 (二) 〔以上本館〕、解剖処、塾 (七室) などが用意されたまでである」と説明している。この石川著書の平面図を複写したものが、兼六会館の図面である。

㈡金沢市立図書館蔵の図面　この図面は同館所蔵の加越能文庫にある「前田家編輯方手写」(明治年間) による教育沿革史 (教育史料巻十) の「旧加賀藩立壮猶館並医学校取調要項」に添付されたものである。石川著書の図面と対比すると、内容的にはほぼ一致しているが (部屋名称は石川著書では活字印刷となっている)、細部について若干の省略がみられる。たとえば、石川の図面では医学館最後方の教師休息処に併設した「別診察処」が除外され、また、入口の「門番」を誤って「内番」と記名している点などである。

㈢石川県立図書館蔵の図面　同館香村幸作課長の検索努

力により、同館で「旧藩学校沿革調」綴が発見された。この綴の脇書に「明治十六年文部省第壱号達ニ依リ取調文部省ニ差出シタルモノノ扣」、「外ニ旧藩学校図面一袋、家塾等寺小屋表一綴、附属一種、学務課」と明記されている。添付図面を市立図書館のものと対比すると、内容的に全く一致しているが、残念ながら虫喰いと折込みのため、複製は困難な状況となっている。市立図書館所蔵の教育史料巻十は、文部省へ提出の旧藩学校沿革調を転写したものと判断してよかろう。

㈣明治十六年文部省第壱号達　この達を検索すると（法令全書、明治十六年一二、内閣官報局、復刻昭五一）、府県宛に文部省が二月五日付で「今般当省ニ於テ教育沿革史編纂候ニ付府県庁及学校所蔵ノ旧記類其他前儒ノ私記古老ノ口碑ニ資リ学制頒布前ニ係ル左記ノ諸項取調本年八月限可差出此旨相達候事」と通達し、「旧何藩学制沿革取調要目」、「旧何藩立学校取調要項」、「旧何藩領地内家塾（寺小屋）取調要項」の三項について、取調方を求めたことが判明した。

「旧何藩立学校取調要項」では、「学校名称」、「校舎所在ノ地名」、「沿革要領」、「教則」、「学科学規試験法及ヒ諸則」、「職名及ヒ俸禄」、「職員概数」、「生徒概数」、「束修謝儀ノ有無」、「学校経費」、「藩主臨校」、「祭儀」、「学校構造及ヒ建物図面」、「学校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ蔵書ノ種類部数」等を取調項目にあげている。

石川県は「学校構造及建物図面」について、「旧藩士津田玄蕃ノ邸ニシテ敷地ハ千七百坪余建物ハ大約八百坪ナリ、左図ハ当時ノ状況ヲ証スルニ足ル故ニ掲ク」と報告している。

㈤石川県立図書館並びに金沢市立図書館に所蔵の医学館図面は、ほぼ同一大で約八五×七二糎である。

図面による医学館の教場と病院の規模はつぎのとおりである。

敷台、講堂、講場(2)、教員席、教師休息処、診察処、別診察処、手術処、医局、当番局、当直所、副直席、煎浸処、司薬生溜、事務局（分局）、解剖処（別棟）

病室（三七室、うち九室は別棟）、広い貧病室一室、看病人溜、病人溜、調理処(3)、茶処、食場、風呂場、作事場

以上のほか、塾生室(7)、門衛、馬屋、物置、井戸(2)、便

所(12)等が設けられている。

文部省達第一号は全国的規模で実施されているから、その控は各府県で保存されている可能性が大きい。また、文部省において、これらが保存されているなら、一層貴重な資料といえる。

（金沢医科大学）

伊勢原市域医療史の若干の問題点
――『神奈川県伊勢原市の医療史』(仮題)の調査と執筆をおえて――

奥富敬之

昭和五十七年正月、神奈川県伊勢原市医師会の依頼を受けて、私の同市における医療史の調査と執筆が始まった。それから三年有半が経過した。そして六十年九月、本論部分の執筆がほぼ完了した。あとは、付篇にするための若干の資料や統計の整理と年表の作成、それに挿絵を選択する仕事が残っているだけである。

本書は、一般の地域医療史や市町村の医師会史とは、やや相違した点が二、三あるものと自負している。

原始時代から書き始めてあるということは、その一つである。

原始の巫医、古代の官医、中世の僧医と軍陣外科、近世の儒医（村医）、および近現代の洋医と、各時代における医